

基本を徹底する教育を

石井： 私はいろいろな身障児を診てきましたが、いま私が直接指導している子というのは、実は少のうございましてね、一時期、私の研究所へ毎週二日ずつ通ってきている子供がいました。まったくしゃべれないような、言葉がまったく覚えられない子供でした。これが、漢字を根気よく見せてやりましたら、ちゃんと漢字を識別できるようになりましたね。人間の脳というものは、使えば働きがよくなるようにできているものです。こういう子供にとっては、その漢字の持つ意味がわかるということは、もう大変な喜びなんです。知的な欲求を満足させるからなんです。そしてその喜びが、つぎの学習に対する意欲を駆り立てるのです。おおよそこういう子供は、一年かかってもかなを一文字も覚えられないのが普通です。

例えば愛子ちゃんという子ですが、愛子の“あ”の字が一年かかっても読めるようにならなかったそうです。ところがその子が、漢字だと一日に一文字ずつちゃんと覚えていきました。それは漢字というものが、さきほど言ったスモール・ステップに当たって

いるからです。

山田： 私の娘とまったく同じケースです。

石井： その子供にとっては“あ”というまったく音声だけで、何のイメージも伴わないものを頭の中に描くなんていうことはまったく不可能事です。これは知能の低い子供にとって、まことに興味のない学習になります。ただ発言だけで、何の意味もありません。

その上、それを表わす字形が、漢字のような必然性を備えていません。これが「あ」という字だといくら言われたって、少しも面白くないわけです。だから子供にとっては、まったく床から天井へ飛びつくような、不可能な仕事をさせられているわけです。だから、一年たっても覚えられないのも無理はありません。

ところが、漢字だとその事情が一変します。猫を飼って、猫をかわいがっている子供なら、「これが猫という字よ」と言って漢字を見せてやれば、「ああ、これが猫という字か」と、心がはずむわけです。そして「これが猫なのか」という思いで字を見ますから、頭の中にそれがかっちり収められ、猫という字形が頭脳に焼きつけられるのです。それを反復して見せてやるのです。私は必ず一日に十五回やれ、と本の中に書いております。

一日に十五回、猫なら猫という字を教えたら、必ず翌日「これは何という字か」と尋ねれば、必ず「猫」と答えられるんです。漢字が読めるようになるんです。だんだん重なっていきますと、もう頭がそういうことで使われますから、つまり、頭を働かせますから、頭の働きもよくなって、猫という漢字を見ればすぐに猫と読める。それが頭の働きですからね。それを繰り返し繰り返しやっていると、自然に目も生き生きと輝く目になるし、いろいろなものやってみようという意欲もわいてきます。

また、それまでは、すぐにカーッとになって、両親も手がつけられないような状態になったのに、そういうことがなくなったと言います。半年くらいの漢字指導で、それからお医者さんに診てもらうときも聞き分けがなくて、看護婦さんとお父さんの二人がかりでないと、診てもらえなかったと言います。それがやはり漢字をたくさん覚えて読めるようになりますと、もう「独りで診てもらおう」という意欲が湧くのですね。「お父さんは廊下に待っていていい」と言うようになった、ということです。そのときの父親の喜びが手紙に書かれています。

そういうように、一つの能力というものをしっかりと養えば、つぎ

からつぎと別の能力が発揮されていくものです。だから私は、教育というものは「あれもこれもやれ」ではなくて、基本的なものを徹底してやらせることだと思います。ところが、今の教育というものは、「あれもできなきゃならん、これもできなくちゃならん」。それも、それを常に一番できるヤツと比較させられて、ハッパをかけられる。親や教師というのは、たいていそういうものですよ。

山田： どうしても、自分の子はよい子になってもらいたい、という欲があるから(笑い)。

石井： 私はよくそのことの間違いをわからせるために、こんな例をもってきて言うんです。

「お母さん方は、色白のかわいい子を見ると、自分の子とすぐに引き比べて“まあなんてかわいらしい子だろう。うちの子もあんな色白のやさしい子であったならどんなに嬉しいだろう”と、そう思う。ところがこんどはそれとまったく反対の赤銅色をした、元気溘溘とした子を見れば、“まあなんて元気ない子だろう、うちの子もあんなに活発な子であつたらいいのに”と思う。しかし考えてごらんさい、白い子を見てはわが子を不満に思い、赤銅色の子を見てはまた不満に思う。その両方を兼ね備えた子といたら、

こっちの半分が白くて、こっちの半分が黒いということになります。それで満足できますか」

と言ってやるんです(笑い)。そう言いますと、親というものはどんなに貪欲なものであるかということ、そして、その望みがまったく不可能なことを望む誤った望みである、ということがよくわかってもらえるのではないかと思って、よくそういう言い方をしています。

しかし、これが色白とか色黒とかという表面的な場合は、目で見えるからよろしい。これがもっと内面的な性格ということになると、むずかしくなります。たとえばおとなしい子を見れば「なんてまあうちの子はがさつだろう」と思います。ところが活発な行動力に富んだ子を見ると、「うちの子はおとなし過ぎて困る」と嘆きます。この場合は案外その矛盾に気がつかないものです。一人の人間が、優しさとたくましさと、この二つを兼ね備えるということはありません。ところがそういう行動力の富んだ子を見ては、わが子と比較し、それからまた反対の落ち着いた子、どちらかという行動力に欠けている子ですけど、おとなしい子を見れば、それをうらやましく思い、わが子を不足に思う。そして自分

の子供に「A という子供を見てごらんない。あんなにおとなしいじゃないの」と言って責める。それから B という行動力のたくましい子を見ると、「あのようにやりなさい」と言って要求する。一人の人間に、そんなことができるはずがないではありませんか。

ところが、学校の教師でも親でも、みんなそれをわが子に注文するわけです。それじゃあ子供にすれば、もう挫折感しかありません。劣等感を持つのが当たり前というものです。これでは、意欲を喪失するのが当たり前です。勉強はだめでも野球ができる子は、野球ができるだけで結構ではありませんか。それを認めてやって「すばらしい」と言って褒めてやり、できない勉強には触れない。野球ではすばらしい長島でも王でも、学問ではそれほどではないと思いますよ(笑い)。いや、長島や王は算数がとてもよくできるかもしれません。しかし、できなくたって、ちっともかわないわけなんです。算数のできないことが、長島や王の値打ちを決して下げることはないからです。私はその人間の優れたところを見出して、それを認めてやり自信を持たせ、意欲を持った子供になるように導いてやるのが教育であると言いたいんです。